

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第16期ゼミ長 土谷 鈴

2019年5月1日、新元号が公表された。新しい時代、「令和」の幕開けである。新元号の公表を受けて記者会見を行った安倍首相は、「令和」に込めた想いについて、次のように述べている。「厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が、明日への希望とともにそれぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいとの願いを込め、令和に決定致しました。」

戦争で惨状を呈した昭和の時代、度重なる未曾有の大災害に苛まれた平成の時代は、我々日本国民にとって、辛く厳しい時代であったように思う。しかし、辛く厳しい時代を乗り越えることで国民の結束力が一層強まった今、希望に満ちた未来を築いていこうという想いが、「令和」という2文字に込められているのだろう。

翻って、我々小野晃典研究会第16期生のゼミ活動を振り返ってみると、我々も辛く厳しい壁に直面したことが幾度となくあった。個性と意志が強いメンバーの集まりであった我々第16期生は、入会当初から、考え方や価値観の違いから幾度も口論になり、お互いを傷つけ合ってしまうことがあった。いざゼミ活動が始まれば、ディベートの準備、基礎文献レポート、多変量解析レポート、そしてビジネスコンテストのプラン案立案に追われ、徹夜をする日々が続いたことがあった。論文執筆活動が始まれば、テーマがなかなか決まらず、苛立ちが募り、メンバー同士、数え切れない程ぶつかり合った。「もうこんなメンバーではやっていられない」そう思ったこともあった。三田祭期間が始まれば、締め切りまでに三田祭論文を完成させることができず、先生をはじめ、周囲の方々に多大なご迷惑を掛けてしまい、己を強く責めた。ゼミからの帰路、涙が溢れ出してしまうこともあった。4年生になり、卒業論文の執筆活動が始まれば、再び己の力不足を痛感し、不甲斐なさでいっぱいになることがあった。

改めて振り返ってみると、我々が直面した辛く厳しい壁は、枚挙に遑がない。しかし、そのような壁に直面するたびに、時にはメンバーと本音でぶつかり合い、時にはメンバーと互いに手を取り合って励まし合い、その壁を幾度も乗り越えてきた。そうして今、我々は『マーケティング論究 第16巻』を完成させた。本論文集には、我々第16期生が、ゼミ活動の集大成として取り組んだ8篇の卒業論文をはじめ、2つのチームに分かれて取り組んだ2篇の三田祭論文、査読を通過して海外学会で発表した英語論文、有志チームで取り組んだビジネスコンテストのプランなどが収められている。本論文集は、まさに、辛く厳しい時代を乗り越え、メンバーとの結束力が強まった今、我々が大きく咲かすことができた花と言えよう。

本論文集の完成は、多くの方々の支えなしには成し得なかったであろう。末筆ながら、我々の論文執筆をはじめとする、ゼミ活動を支えてくださった方々に感謝の言葉を綴りたい。

まずは、同研究会第17期の後輩の皆さんへ。私たちは、先輩として力不足な部分があり、皆さんには辛

くて苦しい思いをさせてしまったことが多くあったと思います。そんな中、小野ゼミ生として、私たちの後輩として、頑張る道を選んでくれてありがとう。辛くて苦しい中でも奮闘する皆さんの姿は、私たちをいつも鼓舞してくれました。皆さんを小野ゼミの17期生として迎え入れて良かったです。本当にありがとう。

次に、同研究会第15期の先輩の皆さんへ。私たちは、先輩の皆さんの姿に憧れて小野ゼミに入会し、皆さんのようになりたいと、ただ只管に背中を追いつけてきました。しかし、ゼミ活動は一筋縄ではいかず、思い悩むことや互いにぶつかり合うことが幾度もありました。そんなとき、いつも助けてくださるのは先輩方でした。先輩方のお陰で、私たちはここまで成長して行くことができました。本当にありがとうございました。

さらに、同研究会の大学院生としてご指導くださった、中村世名さん(第10期OB)、石井隆太さん(第10期OB)、清水亮輔さん(第13期OB)、王 咏奕さん(第16期大学院)、および、於 詩琦さん(第17期大学院)へ。大学院生の皆さんは、私たちが論文活動で行き詰まったとき、いつも温かく、時には徹夜をしてまでご指導してくださいました。大学院生の皆さんのお力添えがなければ、本論文集に収められている論文は、一本たりとも完成し得なかったでしょう。本当にありがとうございました。

そして、家族へ。ゼミ活動に没頭するあまり、帰宅するのが遅くなったり、徹夜の日々が続いたり、家族には多くの心配をかけてしまいました。それでも、家族はいつも私たちを温かく見守り、そして支えてくれました。家族の存在がなければ、私たちはここまでゼミ活動を続けて行くことができなかつたでしょう。本当にありがとう。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。小野先生は、無我夢中でゼミ活動に取り組む私たちをいつも優しく見守り、そして熱心にご指導してくださいました。私たちが満足できる結果を出すことができたときは、私たちを我が子のように称賛して下さり、思うような結果を出すことができずに落ち込んでいるときは、まるで自分のことのように気持ちを理解してくださいました。私たちにたくさんの愛情を注いでくださった小野先生は、私たちにとって、まるで父親のような存在です。小野先生のもとでゼミ活動を行えたことは、私たちにとって一生物の財産です。感謝の気持ちは筆舌に尽くし難いですが、ここに最大級の感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。小野先生へのご恩に報いるべく、小野先生にとって誇り高い小野晃典研究会第16期OB・OGとなれるように、これからも精進して参ります。

2020年1月吉日